

第15回 自然資本のマネジメントに関する研究会 議事概要

日時：令和5年12月19日（火）12:00～14:00

場所：TEAMS 利用オンライン開催

出席者：小田切委員（座長）、神井委員、香坂委員、勢一委員、瀬田委員、瀧委員、橋本委員、平井委員、村上委員、瀧川委員、石井委員、荒木委員、井上委員、松本委員、後藤委員、中澤委員

第15回研究会では、最終報告の構成案、文案のたたき台、将来に向けた検討課題のテーマに関する意見交換を行った。

まず、最終報告の構成案について、研究会メンバーで確認した。その後、自然資本のマネジメントに関して「総合性、持続性発揮のためのポイント」についてまとめた第3章のたたき台、研究会メンバーからメモ入れされた具体的な事例、政策に関する情報を取りまとめ、市町村等の現場で「まず何から取りかかっていたか」を記述した第4章のたたき台について、内容、表現ぶり等について意見交換を行った。さらに、今後、政府や研究者が中長期的な視野から検討すべき課題をあげることを想定している第5章「将来に向けた検討課題」のテーマについて、意見交換を行い、今後の作業スケジュールを確認した。

主な意見交換の概要は以下のとおり。

<最終報告の構成・目次（案）について>

- ・ 神井委員から、これまでの研究会での意見交換を反映した最終報告の構成・目次の案が提案され、合意された。提案の主な内容は、以下のとおり。
 - ・ 市町村等の現場に向けた研究会メンバーからの簡潔なメッセージを別途作成
 - ・ 冒頭にエグゼクティブサマリーを作成
 - ・ 第1章、2章は、中間報告の第1章、4章を再編集し、基本的な考えを記載
 - 第1章：自然資本マネジメントの研究の意義について記載
 - 第2章：問題の所在とマネジメント展開の方向性について記載
(研究者と行政官の視座から全体像を整理)
 - ・ 第3章、4章は、市町村等の現場の関係者に対して、自然資本のマネジメントの取組方向性、ヒント、先進事例を記載。
 - 第3章：自然資本マネジメントの5つのポイントとそのアプローチについて記載
 - 第4章：現場で何から取り掛かれば良いか、先進事例、関連政策を踏まえて記載
 - ・ 第5章は、現場でなく、国や研究者のサイドで中長期的に検討が必要な課題について頭出しし、そのなかに提言コラムを挿入（研究会メンバーのクレジット）
 - ・ 別添資料として、「関連政策の現状と課題」（中間報告の第2章を時点修正したもの）、「研究会の構成、経緯」を添付。

- ・ 提案内容について、参加メンバーの賛同で具体化を進めることとなった。

<第3章 総合性、持続性発揮のためのポイントについて>

- ・ 神井委員から、第3章のたたき台のポイントについて説明があり、これに関して意見交換を行った。説明された第3章たたき台の項目は、以下のとおり。

1. 自然資本の全体像の把握

- (1) 自然資本の全体像がシームレスに把握されている状態

- ①全体像の共有とマネジメントへの波及
- ②地域のモチベーションとイメージ形成の関連性
- ③データ・ファクトの活用と全体像の関係

- (2) 自然資本の全体像把握を実現するアプローチ

- ①全体像把握の“きっかけ”づくり
- ②ウェルビーイングへの結び付け
- ③関連データ・ファクトの収集、可視化
- ④ビジョン構築との関係性

2. 市町村独自のビジョンの構築

- (1) 市町村独自のビジョンが構築されている状態

- ①“やりたいこと”の明確化
- ②市町村サイドの主導権の確保
- ③ビジョンから計画への具体的な落とし込み
- ④生態系サービスの受益サイドから提供サイドへの目線の返還
- ⑤各種計画からビジョンへのフィードバックの確保

- (2) 市町村独自のビジョンを構築するアプローチ

- ①ビジョン構築の“きっかけ”づくり
- ②ウェルビーイングへの結び付け
- ③ビジョン構築等のための多様な主体の参画の確保
- ④データ・ファクトの入手・分析
- ⑤専門的な知見の活用

3. アジャイル型・順応型のマネジメント展開

- (1) アジャイル型・順応型のマネジメントが展開されている状態

- ①“やれるところからやる”アプローチの採用
- ②“一点突破、横展開”の発展的なアプローチの採用
- ③複層的な関係に対する柔軟なアプローチ
- ④的確なモニタリング、評価等のフィードバック確保

- (2) アジャイル型・順応型のマネジメントを実現するアプローチ

- ①柔軟なアプローチの必要性の認識共有
- ②柔軟なアプローチの機会を普及する枠組み等の設定
- ③的確なモニタリング、評価等のフィードバックの確保

4. 多様な担い手の活躍

- (1) 多様な担い手が活躍している状態

- ①意思決定プロセスへの多様な主体の参画

- ②対策実践ステージへの多様な主体の参画
- ③デジタル技術の活用
- (2) 多様な担い手の活躍を実現するアプローチ
 - ①多様な主体の参画に関する普及啓発
 - ②参画のための情報共有と透明性の確保
 - ③担い手となり得る関係者への重点的な働きかけ
 - ④デジタル技術の活用と新たな参画スタイルの提案
- 5. 行政サイド、住民サイドの人材育成と専門家の確保
 - (1) 行政サイド、住民サイドの人材育成が進み、専門家が確保されている状態
 - ①多彩な人材育成プログラムの提供
 - ②デジタル技術の活用による柔軟な学習環境の整備
 - ③多様な機会を有効に活用した人材育成の推進
 - ④専門人材の効果的な確保と活用
 - (2) 行政サイド、住民サイドの人材育成と専門家の確保を実現するアプローチ
 - ①多様な人材育成プログラムの提供
 - ②実践活動での経験等を通じた人材育成
 - ③デジタル技術の活用による柔軟な学習環境の整備
 - ④専門人材の効果的な確保と活用

(メンバーからの主なコメント)

- ・ 「自然資本のマネジメントに意欲的に取り組んでおられる地域(基礎自治体)に共通して見られた状態を、マネジメントの戦略的な転換を可能にするためのポイント(マイルストーン)として抽出する」におけるポイントとは、自然資本マネジメントの総合性・持続性を発揮させるために特徴的な5つの点という理解を確認。
- ・ 自然資本マネジメントの5つのポイントは、必要条件であって、十分条件でないと考える。また、第1章において、自然資本の概念、重要性を理解いただくことと、ウェルビーイングに資することを説明することが重要と考える。
- ・ 各章の対象とする読者の違いが分かりやすいように、どのように表現するか工夫が必要。
- ・ 第4章にも関連するが、先進的な取組事例などは、積極的に固有名詞をあげた方が良いのではないか。
- ・ 市町村の方に分かりやすく情報を提供するには、「やりたいことの明確化」、「きっかけづくり」、「やれることからやる」、「1点突破」といった要素を表に出すと良いのではないか。きっかけ、動作、フロー順に整理することも一案か。

<第4章 まず何から取りかかっていたか について>

- ・ 神井委員から、第4章のたたき台のポイントについて説明があり、これに関して意見交換を行った。説明された第4章の主な項目は、以下のとおり。
 - 1. 自然資本の全体像の把握
 - (1) 全体像把握の“きっかけ”づくり
 - (2) ウェルビーイングへの結びつけ

- (3) 関連データ・ファクトの収集、可視化
- 2. 市町村独自のビジョン構築
 - (1) ビジョン構築の“きっかけ”づくり
 - (2) ウェルビーイングへの結び付け
 - (3) ビジョン構築等のための多様な主体の参画の確保
 - (4) データ・ファクトの入手・分析
 - (5) 専門的な知見の活用
- 3. アジャイル型・順応型のマネジメント展開
 - (1) 柔軟なアプローチの必要性の認識共有
 - (2) 柔軟なアプローチの機会を普及する枠組み等の設定
 - (3) 的確なモニタリング、評価等のフィードバックの確保
- 4. 多様な担い手の活躍
 - (1) 多様な主体の参画に関する普及啓発
 - (2) 参画のための情報共有と透明性の確保
 - (3) 担い手となり得る関係者への重点的な働きかけ
 - (4) デジタル技術の活用と新たな参画スタイルの提案
- 5. 行政サイド、住民サイドの人材育成と専門家の確保
 - (1) 多様な人材育成プログラムの提供
 - (2) 実践活動での経験等を通じた人材育成
 - (3) デジタル技術の活用による柔軟な学習環境の整備
 - (4) 専門人材の効果的な確保と活用

(メンバーからの主なコメント)

- ・ (各メンバーからのメモ入れについてボックス内に表記し、本文のたたき台との対比を行いつつ議論する資料を作成していたことを踏まえ) いくつかの事例は、(メモ書きの)ボックスも残した方が理解しやすいのではないか。個別事例について情報が参照できるとよい。
- ・ 様々な意見を反映された結果、ボリュームが大きい。コンパクトにしつつ、辞書のように使えるようタグ化することも一案ではないか。
- ・ 1点突破や横展開の応用系として、特に自然資本に関わる行政分野の特徴である他省庁の事例を横展開することの有効性についても記載してはどうか。
- ・ エグゼクティブサマリーの作成がポイント。視覚的に分かりやすく見せたい。
- ・ フューチャーデザイン、シナリオプランニング、アジャイル、バックキャストिंगといった用語は読者にすんなり受け入れられるものか。使い方について留意が必要と思う。
- ・ 行政官等に対するマニュアルとしての位置付けなら、自治体がより理解しやすくする工夫も必要と思う。
- ・ この報告書の位置付けは、研究論文でもマニュアルでもなく、アイデアの宝箱、というイメージが良いのではないか。新しいタイプの報告になろうかと思う。

<第5章 将来に向けた検討課題のテーマ(案) について>

- ・ 神井委員から、第5章のテーマの案の提案があり、これに関して意見交換を行った。説明の主なポイントは、以下のとおり。
- ・ 今後、2月上旬に素案をいただき、研究会メンバーで確認し文言調整。その後、提言コラムにふさわしい柱書きを作り、そこにコラムがぶら下がる形式を想定。3月11日の研究会までには完成を目指すスケジュール感。
- ・ テーマの案は、以下のとおり。
 - 計画の在り方：自律分散、ウェルビーイング起点だと規制・拘束でない方向性
 - 対話・合意形成のプロセスデザイン：フューチャーデザイン、周辺的存在の尊重
 - デジタル化の進め方：データの利活用、GISのポテンシャルなど
 - 土地利用の在り方：公益性による制限の可能性、利用と所有の区分
 - 担い手の在り方：多目的な活動、既存組織との2階建て論、リアルとバーチャルの融合
 - 上記の他に、本研究会と関係性の深い研究会メンバーの研究活動に関連する話題を記述する方向
- ・ 提案内容について、参加メンバーの賛同で具体化を進めることとなった。

以上